



# 今日からできる 『社会貢献』

安心を考える季節

第6回 (株)NTTデータ経営研究所  
村橋 保春

## 初々しさを守る

春。少しだけだるさをためたその風が、木々に芽吹き季節を伝える。深い眠りからゆずられて、そのそと虫たちが動き出す。まどろんだ気持ちは、きらめく春陽を浴びてわくわくとした気持ちに切り替わる。

春が似合うのは、子どもたちだろう。弾んだ心で走り回り、見るもの聞くもの喜びに変えてしまう子どもたちは、周りの大人たちにも幸せな季節を伝えてくれる。心が沈んだときには、幼稚園の入園指揮、小学校の入学式のビデオを見ると良い。内なる活力を小さな体から湧き出している集団のエネルギーに触れると、いやがおうもなく元気になる。

春には大人たちに役割が加わる。子どもたちの初々しさをやらかく守ってあげること。春風が花弁のこよりをゆつくりとほぐしてあげるように、小川が小さな魚に隠れ場所と泳ぎ方を教えてあげるように、大人たちは子どもたちが素直な気持ちのまま育つことが

できるように見守る役割がある。春は子どもたちにも大人たちにも、とても大事な季節である。

春は安心を考える季節といえる。安心できる街は多くの人が安心な暮らしがしたいと考えることで出来る。安心であることを誇りに感じる季節があることは大切である。

## 安心で成り立つ社会

少し前までは、しつくりこなかつたビジネスが2つある。安全安心ビジネスと水ビジネスである。豊かな水と安心できる社会は当たり前のように思われていた。

安心できる社会を前提に成長したのがコンビニエンスストアである。日本全国ほとんどのところで深夜でも事故や犯罪を恐れなくてもいため、24時間営業できる。コンビニエンスストアの店員が店に備え付けの拳銃で強盗と渡り合っている外国の衝撃映像がテレビで流されるときがある。日本に生まれ、暮らしてよかつたと思える瞬間である。

世界では、自動販売機が使えない国もあると聞く。日本では自動

販売機は飲み物やタバコを手に入る道具であるが、一部の国ではお金をしっかり貯め込んだ路上の貯金箱と映るらしい。貯金箱の部分をこじ開けてお金を持ち去られるのだから、自動販売機を設置する人はいない。

地域社会は相互に見守りあう関係があつた。高度成長期により人々が企業社会に吸い取られ、地域社会から継続して発展する芽を摘み取られたときから、地域社会の安全は徐々に崩れていった。安心をビジネスとする嚆矢は警備業である。東京オリンピックや大阪万国博覧会など国を挙げて海外から多くの賓客を迎えるときに、より安心な環境が求められビジネスとして発展した。警備業法は大阪万国博覧会の2年後に制定されている。国際化や情報化が進むことで、セキュリティに関する問題意識も要求水準も急速に高まっている。安全安心に関わるビジネスは今後も需要は拡充し、重要な役割を担うものと思われる。

安心できる社会をつくるためには、2つの方法がある。ひとつは



沼津アーケード名店街 HPより

防備を強化することである。もうひとつは環境を変えることである。激しく肉体がぶつかりあうスポーツにアメリカンフットボールとラグビーがある。屈強なスポーツマンであっても競技を通じて怪我をすることがある。アメリカンフットボールはプロテクターを何重にも施し、ラグビーは怪我を回避するルール変更を重ねることによりスポーツとして組み上げていった。安心できる社会をつくるためにセキユリティをビジネスとしお金をかける手法は、防備強化、アメリカンフットボールであ

### ふたたび安心を味わう

る。かつての地域社会は、お互いが見守りあう環境の下に安心な暮らしが成り立っており、ラグビータイプといえる。社会貢献の観点からは、安心できる社会の環境整備をいかに支援するかが大切になってくる。まずは成功事例を見ていきたい。

神田西口商店街は、かつて東京都庁を背景としてビジネスシーンで賑わった商店街であった。都庁が新宿に移転してからも周辺のビジネスマンを中心に集客し一定の賑わいを保っていた。しかし、風俗系の店舗が徐々に商店街に出没し出すと客層も変わり、昼間でもOLなどはわざわざ遠回りをする商店街に変わってしまった。歴史と伝統のある商店街のこうした現状を憂い、商店街関係者が団結し、行政や地元警察とも連携して街路美化とパトロールを行い、客引き等の行為をやめさせ、風俗系店舗の退店を進めた。勇気のいる活動ではあるがお互いに励ましあい、少しずつ目に見える改

善を喜び、弛まず臆せず活動し続けることで、風俗系店舗はすべて退店した。今では平日はビジネスマンで、休日は家族連れで賑わう商店街に戻っている。

静岡県沼津市にも事例はある。かつては沼津市一の商店街であった本通商店街は震災復興において防火建築帯としてアーケード建築を実施し、沼津アーケード名店街として再生した。しかしながら、建物の老朽化と周辺環境の変化により商店街としての活力は低下し、衰退した商店街として捉えられるようになった。

沼津アーケード名店街に平成16年に「まちの情報館」ができた。地域の交流の場を提供するだけでなく、同館の関係者は積極的に挨拶をし、周辺を掃除し、プランターに草花を植える活動を続けた。少しずつお互いに挨拶をする人が増え、きれいになった街路を汚す人はいなくなり、ボランティアで草花を飾る人たちも現れた。ふたたび居心地のいい街に戻りつつある。割れ窓理論というのがある。窓ガラスを割れたまま放置すると粗

雑に扱われてもいいモノとして捉えられ、ついにはすべての窓が割られるという法則を示している。人は安心を感じられないところでは、安心を阻害する行動をとりやすくなる。反対に、清潔で安全な環境では安心を高める行動をとると考える。街中にあるお地藏さんには花やお供えが絶えないのは割れ窓理論の逆の現象である。

### いたわりあう気持ちで安心を育てる

子どもたちが元気に育つことを見守りたい気持ちはだれもが持っている。清潔で安全な暮らしを続けたい気持ちはだれもが持っている。日本の地域社会はこうしたたいわりあう気持ちを素直に出しあうことで、自ずと安心な社会ができていた。

安心を高める社会貢献は、大きな声で何かを唱えるのではなく、昔から地域社会がやってきたことをもう一度始め、こつこつと続けることだと考える。掃除をする、挨拶をする、子どもたちやお年寄りを慈しむ。肩の力を抜き、素直に社会を見直すことを応援してもらいたい。